

関西の学術研究都市について（58・6・4）

奥田 東（大15理甲）

ただいま御紹介にあずかりました奥田でございます。この演題の表示には学術研究都市となっておりますが、京都府が進めようとしている正式な名前は、文化学術研究都市と言っておりますので、一寸お断りして、今迄に至る経過と、現状とそして今後の展望について、お話し上げたいと思います。

今から十年位前になりますが、ローマクラブから『成長の限界』と言う報告書が出まして、私も大変ショックを受けました。報告書の要点を申し上げますと、世界の人口は大変な勢いで増加しているけれども食糧の生産は追い付かない。従って世界的な食糧の不足・飢餓が訪れるであろう。地下資源は急速な勢いでなくなりつつある。逆に大気や海水の汚染はどんどん進んでおる。そういうことで人間が生存するのに対して非常に悪い条件になり、二〇二〇年から二〇三〇年位に人類の生存に対して大変な危機が来ると言うのでございます。それに対して考えられる施策は書

いておりますが、現状においては大変困難な情況ばかりで、人口の増加を抑制すると言っても、先進国ならとも角、発展途上国の人口の制限は大変難しい問題です。いろんな点で大変ショックな事が書いてあります。二十一世紀の始めと言いましても今から四〜五十年先の事です。今の若い人はみな生存中ですが、そう言う時期に人類の危機が来ると言う事でショックを受けた訳です。

地下資源がなくなる事は当然の事として、人類は地球以外に住む所はない訳ですから、使えばそれだけなくなってしまう。その事にあまり注意をしないで過去においては大量生産、大量消費で物資の生産コストが下がり、人間の生活が豊かになると言っていて、一時は『消費は美德である』と言った言葉が使われた時期もありました。これは大変間違った考えで、地下資源は出来るだけ大切に使用して我々の子孫のために温存して置かなければならない。特に日本は地下資源が殆ど枯渇して色々な原料は全部外国から輸入しておる訳です。そこで日本のような国では出来るだけ少ない資源で、それを活用して生活を豊かにする工夫をしなければならぬ。そういう工夫をするという事が日本にとって大切であるだけではないに、世界の人類の将来を考えても非常に大切な事である。そういう省資源で豊かな生活を送る工夫をすることが日本人の一つの務めであり、使命であると感じまして、その為には色々な意味で発想の転換をしなければならぬと思います。

今一つ日本人が発想の転換をして行かなければならないのは、日本人が目標を失ったと言うこ

とです。明治維新以来、欧米の先進諸国から色々な物を学んで近代化を進めて来ましたが、それが今や成功したと言いましようかマラソンに例えますと今迄は欧米の先頭グループが走っており、日本はその後から追いかけて来た訳であります。追いかけている間は先頭の人を目標にして早く追い付こうと努力した訳ですが、今や学術研究・産業の面についても言えると思いますが先頭グループに入った訳です。

先頭グループに入ると、先頭グループとしての色々の努力をしなければならない。例えば最近非常に喧しい遺伝子の組替えについては、先頭を切ったアメリカは大変な苦勞をしました。遺伝子を組替えるのは今迄地球上になかった生物を作ることですから、そういう生物が世界中に広がると、とんでもない病気が起こる心配をしなければならぬ。そこでアメリカでは非常に厳しい規制をして特殊の装置が無ければ遺伝子の組替えの研究をさせなかった。ところが段々やってみると、遺伝子を組替えた生物は不自然な生物であつて外へ出ても抵抗力が弱いために、十分な良い環境を与えておかなければ直ぐ死んでしまうことが判つて来て特殊の装置がなくても遺伝子の組替えをやつても宜しいことになつた訳です。

先頭グループというのはいろんなことを考慮して試行錯誤を繰り返して非常に無駄な実験もやつているけれど、追い掛けて行く方はそういう無駄はしなくても済む訳です。そういう意味で今迄の日本は楽でしたが、先頭グループに入りますと先頭グループは先頭グループらしく試行錯誤

をやり、無駄をやりいろんな努力が必要なわけでございます。

日本人は物真似が上手だけれど獨創性がないとよく言われますが、私はそうは思いません。日本人にも獨創性はある、唯、今迄目標を捕らえて後から追いかけている間は獨創性を發揮する必要がなかった訳でして、先頭グループに入った上は自ら目標を設定し、努力して行かなければならない。そういう状態になった現在、日本人はもっと獨創性を發揮しなければならないと思うわけです。

私が狙っております文化學術研究都市は、そう言う日本人の獨創性によって新しい基礎研究をやり、その研究に伴って新しい技術が開発され、その新しい技術によって新しい産業が創出されて来る。そう言う街を創りたいと言うのが私の大きな狙いであります。そういうことをやって行かなければ資源の少ない日本で豊かな生活はやって行く事は出来ないと言うのが私の考え方でございます。

昭和五十三年九月にそう言う考えで、前の阪大の総長をしておられた岡田さんと相談しまして、関西學術研究都市調査懇談会をつくりました。私はこう言うことをやるには発想の転換をして今迄とは違った行き方で行かなきゃいかん、国公立と行った差別も撤廃するし、産業界とか學術界と言う区別も取り払って、産学共同で、国公立共同で皆が力を合わせてこの問題に当らなければならぬと言っていたものですから、賛成して下さった方は多いのですが、他方、趣旨には

賛成するから会合には加えてくれ、しかし自分の名前は出してくれるなど言う方が可成り居られました。産業共同反対の空気は各大学の教官の間にも、学生の間にもあったからです。そこで主として大学のOBが集まって発足しました。

この懇談会で昭和五十三年の十二月に第一次の提言を出しました。これは理念的な物でございますが、五十四年七月の第二次提言は多少具体性がございまして、こう言う研究をやるべきだ、こう言う問題について検討すべきであると言うことを書いております。五十五年五月には先ず何から手を付けるべきかについて第三次提言を出し、五十七年十二月に第三次提言・其の二を出しましたが、これに就いては後に時間があれば詳しくお話をしたいと思っております。

懇談会はこのようにいろんな提言を出して来た訳ですが、幸いに国土庁が取り上げてくれました。五十四年四月には国土庁が独自の予算を持ち、研究会を作つて調査を開始されました。そして五十六年三月に調査結果の発表がございします。その要点は所謂リサーチコンプレックス構想で、国土庁が調査をしますと各府県色々と学術研究都市に似た考えがございします。兵庫県は西の播磨の方に実際の施設が進んでおり、大阪府、和歌山県、滋賀県それぞれ学術研究都市に近い考え方があります。それらがお互いに足を引っ張りあうようになってはいけませんので、近畿の各府県で考えていることが全体として進んで行くように、各府県の研究機関を一つのリサーチコンプレックスという考え方をとつて、その中核になるものを京阪奈丘陵に作るというのが国土庁の構想

でございます。我々の提言にも書いてあったのでありますが、こうして京阪奈丘陵が浮び上がって来た訳であります。

一方、五十五年に民族博物館館長の梅棹さんが新京都国民文化都市構想を発表されました。京都府の諮問機関に二十一世紀ビジョン懇談会というのがありますが、その席上で梅棹さんと私とが議論を致しました結果一緒にやろうではないかと言うことになって、京都府の第三次府総合開発計画の中で、文化学術研究都市と文化を加えた名前が使われるようになって来た訳であります。そして細部は省略致しますが、五十八年三月に関西文化学術研究都市建設推進協議会が作られました。

この協議会は行政関係、経済団体、大学関係の人——此処まで来ますと現役の人に迷惑を掛ける心配がなくなりましたので京大、阪大、神戸大学やその他公立、私立色々な所から学長に入って貰い、学職経験者等を加えて五十人程の委員でございますが、この委員会には委員長がございません。関経連会長の日向さん、京都府の林田知事、大阪府の岸知事、奈良県の上田知事それに学職経験者の代表として私が入って、その五名が代表委員となり、会議を開いた時は代表委員が話合っただけが議長になると言った運営をする会でございます。

この協議会で今後の、特に政府に対する働きかけをして行こうと言う訳です。会には学術部会と行政部会の二つの部会がありまして、学術部会の中では研究都市に何をやるか、どういう順序

で何を造るかを議論する予定ですが、六月の末か七月の始めに発足する予定でおります。

現在の構想はクラスター方式とっておりますが、クラスターとは葡萄の房と言う意味で、葡萄の房の様に山林の中に点々と都市が出来、それを交通機関で結ぼうと言う訳ですが、京都府の田辺町、精華町、木津町それから大阪府の枚方市、四条畷市、奈良県では生駒市に跨って九つのクラスターが出来ます。その中で一番大きいのが木津町で、人口が四万位、他に一万幾らと言った色んな大きさのクラスターが出来ます。その中に人間が住む場所とか研究所等が出る訳です。そう言う形で開発して行く構想で現在マスタープランが作られつつあります。五十七、八の二カ年に跨りまして国土庁、建設省、運輸省、農林水産省、林野庁、通商産業省の六省庁に調査費が出て、夫々に調査をして、総合調整計画を策定して五十九年から事業に着工しようという事になっております。

そう言うことで街造りそのものは着々と進みつつあります。其処にどう言う研究機関を設けるかは、今の国の財政状態でございますので、国立研究機関を作るのは大変困難でございます、其の点苦労しつつあるのが現状でございます。現在差し当たってやりたいのは、此処に中核機構を先ず作りこの中核機構が全体のリサーチコンプレックスの中核になっていろんな企画調査をやりたいと考えております、先に申し上げた推進協議会の学術部会で原案を作ろうと思つてゐる訳です。実際に着工しても道路の土地買収から始まって、建物を立てるのは何年か先になります

が、建物が出来るようになってから中核機構を作ったのでは遅いので、もっと早く作らなければなりませんし、これには何も建物がなくても宜しいので、大阪辺りの施設を使って先ず始めようと相談しております。

京都府が国に対してこう言う施設を誘致したいと具体的に動いておりますのが第二国会図書館でございます。国会図書館は東京にあり、名前は国会図書館ですけれど、設立目的には国民に対するサービスも含まっております。日本で出版される本は必ず二冊を国会図書館に寄贈する事になっております。今の様な出版情勢ですから、ここに集る本は大変な量になり、現在も地下七階か八階かの大変大きな書庫を建設中でございますが何年か先には一杯になってしまふ事が計算上出て参りますので、国会図書館としては第二国会図書館を災害等の事も考えて、東京から離れた関西に作るべきであるという考えでそれを検討する委員会に三百万円の子算が出て、調査が始まっております。これをこの京阪奈に作ってほしいと京都府が陳情しております。

もう一つ厚生年金休暇センター、これは厚生省の関係ですが、ここに持って来ようと京都府が働きかけております。それから国立総合芸術センター、これは先程の梅棹さんの構想の一部でございます。梅棹さんの考え方と言うのは我々が言ってきた学術研究都市とは一寸違っているのですが、前の総理の大平さんの時に田園都市構想と言うのがありまして、日本国中何処に居ってもある水準の文化生活が出来る様にしよう。それに依って農村においても、地方都市においても、

必ずしも東京に出て来なくても、ある程度の文化生活が出来るようにして、大都市に人口が集中するのを防ごうと言うのが大きな構想でございます。そう言う文化センターと言ったものを全国に何百か造る、その文化センターを動かし、あるいは其処に美術品を持って行くとか、其処で演劇を見せるとか、あるいは音楽会を催すとか言うことになる訳ですが、その元締になるようなものが今構想されている国立総合芸術センターでございます。其処へ世界の美術品を集めて来る。そして其処では演劇活動も行われるし、音楽会も行われる。其処で育ったのが全国を巡回する。国体と言うのが全国を回っております。第二回目が今度京都でやろうとしておりますが、この国体のような考え方で、重点的に政府が文化活動の促進をする予算を組んで、全国に言う文化センターを造って行こうと言うのが構想でございます。その中核にあるものを京阪奈に持って来ようと言うので、先程申し上げた私の言う学術研究都市とは少し構想が違いますけれども、幸いに相当広い二五〇〇ヘクタール程の面積がありますので、其処へ両方持って来ようと言う訳でございます。

此処で一寸お断りしたいのですが、文化学術研究都市は屢々筑波学園都市と比較されます。新聞等は最初に私が言い出した当時には筑波の関西版だと表現しましたが、私の考え方はそれと違っております。筑波の場合には首都圏整備計画に従って、東京都内になくても良いものを全部筑波に移転しよう、具体的には各省庁の研究機関や昔の教育大学が筑波に移った訳でございますが、

東京都内になくても良いものを移して、其処で働いている人も、あるいはそれに関連する人も筑波へ移住させて首都圏の人口を減らそうと言うのが初めの発想でございます。御覧になった方も多いと思いますが筑波の学園都市と言うのは大変立派なものが出来ており、各研究機関夫々非常に立派な物が出来ております。しかしそれと関西に造ろうと言うのは発想が違います。現在出来ておる各省庁の研究機関は現状において何を研究すべきかと言うのが発想でございますが、私の言いたいの先程申し上げたように、現状に捉われないで、将来どう言う事が必要なかと言う、発想の転換をした物を造ろうと言うことで向こうとは一寸違う訳です。動機も違うし出来上った物も違うと思います。筑波の方は研究所を先に造りまして、其処に働く人は公務員宿舍のような物を住宅公団が沢山造った訳ですけども、何分東京から七〇kmばかり離れております。東京の人口を移そうと言う発想ですから通勤出来ない距離をわざわざ選んだ訳です。処が行く人にすれば子供の教育だとか何とか色々な事情がございまして、東京に居る人が仲々筑波へ移らない、そこで住宅の面では偏った物が出来て、单身宿舍が一杯あると言うような事ですが、こちらの場合にはそうではなく、大阪からでも、神戸からでも、場合によれば名古屋からでも一時間一寸で行ける距離で、寧ろ京阪奈の九つのクラスターに住んで居る人達が大阪や京都へ通勤することが可能な位置でございますので非常に違った姿の街が出来ることを期待しております。

それから其処に造る物なんですが、第三次提言・其の二で我々の委員会が出した提案では国際

高等学術研究所を先ず造ろうと思っております。これは名前だけでは一寸判り難い点があると思えますので少し具体的に御説明しますが、非常に高い水準の研究をやる、あるいは高い水準の独創的な発想が生れるような場所を考えて見ると外国には色んなものがある訳です。例えばプリンストン高等研究所、これは国際的な一流の学者を集めて研究しておった訳で、ノーベル賞を貰われた湯川さんも何年間か其処の所員として向こうへ行っておられました。そう言つた非常に高い水準の人を集めて其処で研究をすると言ふ形の高等研究所がございます。もう一つはプロジェクト型と言いますかウィーンにありますIUSAと言ひまして各国政府が金を出して色んな問題についてシステムアナリシスをやると言ふ訳です。そう言ふ形の高等研究所がございます。それからもう一つはセミナー型と言ひますが一例はアスペン文化科学研究所でございます。

我々が狙つておるのはこのセミナー型でございます、現在もシンポジウムと言ふのがよく開かれますけれども、これは数日で終わってしまうのが通例です。そう言ふことではなくて国際的に一流の学者が一堂に会しまして、出来れば数週間、あるいは一カ月位其処に滞在して一緒に其処で生活しながら議論する。一流の学者が議論している間に其処で色んな新しい発想が生まれる。その生まれた発想を夫々自分の研究所へ持ち帰つて研究をし、その成果を持ち寄つて又討論をする。そう言ふことを繰り返す事によって非常に新しい研究が生まれる。

アスペンでやっている事は一寸違ひまして、一つのテーマがありまして、そのテーマに対して

一流の学者が集まって、あるいは実業界の人が集まって何らかの提案を出すと言うのが現在アスペンでやっている事ですけれども、所謂セミナー型で我々が考えているのは必ずしもそう言うテーマについて提言すると言うのではなくて其処が一つの研究所になると言うようなことを考えている訳です。これは必ずしも自然科学的な事ばかりではなく、もっと社会科学的な、例えば南北問題なら南北問題について一流の学者が国際的に集まって議論をしようと云ったような事も考えたかと思つてゐる訳です。

そういうセミナー型の研究所はある程度の施設は必要です。会議場だとか、其処に集まつた人が生活する場所だとかは必要だけれど所謂試験管を振るような実験室は持たない。其処には固定して定員もない。ある問題について国際的に集まって来てそして夫々別れて行く。流動型、開放型研究所と言う表現を私はしている訳ですが、人間も流動する、研究テーマも流動する、そして非常に開放的でありまして外国の人も来るし、日本の一流の人も来る。例えば国立の大学の人が来るのでなしに私立の大学の人も集まって来る。そう言うことで、ある問題を設定して、一流の人が、国際レベルの研究者が集まって、ある程度滞在をして、それで場合によれば夜中に酒を飲みながら話をする。シンポジウムとよく言いますが、本来シンポジウムとは一緒に集まって酒を飲むと言うのが語源だそうであります。そして一杯飲みながら皆と話をする処に新しい発想も生まれる訳です。ヨーロッパの人はアスペン研究所のような特別な組織ではなく、ライン河

の畔の古城なんかに集まって話合うと言うことは昔からやっており、そういう処から非常に独創的な物が出てゐる訳です。そういう非常に開放された雰囲気で一流の人が話合ふ。其処である発想が生まれたらそれを持ち帰って自分の処で研究して見て、次の時又話合ふと言つたような非常に融通性のある、自由な然も独創的なアイデアが生まれるような高等研究所を指向しておる訳です。

これには必ずしも建物が無くても、将来はそう言う目的の為に使える建物を京阪奈に造りたいと思つておりますけれども、先程申し上げたように京阪奈に実際に建物が出来るのは早くても三四年先になりますので、それまでは私自体待つておれない。そんな先まで生きてゐるかどうか判りませんから来年からでもやろうと言う訳で、京大や阪大の人達に話をしておりまして、参加して貰うのは京大や阪大の人達だけではありませんが、中心になつて事務を執るのはそう言う処でやつて貰おうではないかと言う事で、沢田総長などと話合つてゐます。そう言うことを京都でやれば、国際会議場や京都のホテルを使ってやる、大阪でやれば大阪は又大阪で考えてやる、と言つたように先ずそう言う事をやつて見て産業界の人にもそれに参加して貰つて、高等研究所はこんな事をやるんだという事の実績を見せよう、実状が判れば産業界の協力も得られるようになると思ひますので、そう言う様なことで高等研究所の構想を進めつつあります。

その他、提言として印刷物で未だ外へは出しておりませんが、いま一つ考えております

のが連合大学院構想と言うものでございます。委員会で討論し、構想はまとまりまして今文書を作って貰っている訳ですが、その委員会に文部省の係の人に来て貰って現在の連合大学院について話を聴きました。現在文部省に持ち込んでいる連合大学院と言うのは何れも現在大学院を持ってない大学、あるいは修士コースまでは持っているけれどもドクターコースは持ってない大学が幾つか集まってドクターコースを作ろう、個々の大学が申出ても文部省は今日の状態で仲々認めようとしないので、幾つかの大学が連合して一つの大学院を持つと言うのが連合大学院構想として文部省に持ち込んでおります。これに対して文部省としては、そう言う大学院を作る事によって却って大学院のレベルが落ちることを心配して必ずしも良い返事をしておらない訳です。

連合大学院については今、朝日新聞の論説委員をしている永井さんが文部大臣の頃に考えた事として、大学の学部を持たない大学院大学を作る、その大学院大学については幾つかの大学がそれに参加すると言ったようなことで非常に高い水準の大学院を作ろうと言う構想でありました。東京で多少の動きはあったのですけれども、何れも成功しておりません。私がこの学園都市の問題で永井さんに会った時に関西で一つ文部省が最初に狙っていたような非常にレベルの高い連合大学院を作りなさいと言うサゼッションを受けた訳です。

その後こちらで話をしておりまして京都大学と大阪大学の工学部の間では、人事交流もありまして、大学院の単位もある程度お互いに認め合おうではないかと言う話合いもやっております。

多少の素地がありますのでこの二つの大学で現在の大学院にないような学際的と言いましうか新しい大学院を作ろう。現在の大学院を大きくしようというような事は財政的な事情もあつて難しいのですが、京都大学でもない、大阪大学でもない他の方々にある大学でもない、学部を持たない大学院大学を作ろう、その中心になって動くのは京大と阪大で、それに他の大学からも参加して貰おうではないか、卒業生も非常に広く集めようではないか、場合によっては其処に国際的な人にも来て貰おうではないか、と言つたような現在のドクターコースにない問題を検討する、そして非常にレベルの高い連合大学院を作ろうではないかと言う話が進んでいる訳です。それを文書にして第三次提言・その三として出そうと思つております。

その他に木津の地区には先端技術開発関係の産業が集まる。これは主として民間の研究所と言ふことになるかと思ひますが、所謂テクノポリスのような考え方の先端産業が集まるような場所を考えたらどうかと、これは京都の経済同友会の人から提案がありまして、ある程度の印刷物が既に出ておりますが、そう言うことを考えようではないか、そういうものが出来ると先の高等研究所で新しい発想が生れ、そして連合大学院辺りで実際の研究者が養成され、それから新しい先端技術が開発され、新しい産業が生まれて来ると言つたような事に、一連として私が申し上げたようなことに関連がありますので、先端産業の集まる場所を作りたい、と言ふことでこれも現在構想の段階で何が何時出来ると言ふ状態には成つておりませんが進めております。

それからもう一つ第三次提言・その一の中に出ておる訳ですが、パイロットモデル都市を造ることも考えております。先程も申し上げておりますけれども、必ずしも研究所と言うものが具体化はしておりませんけれども、二十一世紀に日本がぶつかるといふ問題はいまもう判っておる訳です。例えば資源がない状態であるとか、エネルギー資源がない、石油も少なくなつて来る、電力も高くなつて来る、そう言うことは当然予測される訳ですから、新しくこれから造る街は、街その物を資源のない状態を予測した街を造らうではないか、例えば建物を造る時にも断熱構造の建物を造りまして、ソーラーシステムを取り入れて太陽光線を極力利用する、そう言った住宅を造る。そうすると最初はコストが掛かって当然高くなる訳ですが、其処に何年か住んでいる間には安くなる。そう言う街を造つて見ようではないか、断熱構造と言いましてもいろんな構造がある得る訳ですから、こう言う構造で造ればどれだけエネルギーが節約出来るのだと言うことを夫々の家にメーターを付けて計算が出来る様に、つまり街そのものが一つの実験のフィールドとして捉えてやってみたらどうかと言うことでございます。言い遅れましたが、學術研究都市と言うのは一応住宅都市整備公団が主体になってやります。その他の大手の地主、例えば近鉄不動産とか京阪電車とか、日本生命だとか住友不動産とかいろんな処が持つておる訳です。その土地に、デベローパーに協力して貰つてやろうと言うので、先のクラスター方式が出て来た訳ですが、それからデベローパーが造る時に夫々に話をかけて、ただ単に住宅を造つて売り出すのではなくて、夫々

に性格を持った住宅を造つて貰つたらどうか、その一つとしてエネルギーを節約出来るような住宅を造つたらどうか、あるいは水資源にしても将来不足することは判つておりますし、現在一応の計画は出来ておりますが、それ程豊富ではない訳でして、水を節約する為に所謂中水を利用する、これは方々に発想がございまして、ある程度の試みが行われておりますけれども、一遍使つた水を浄化して洗濯だとか、水洗便所だとかにはそういう中水を使う、その為には上水、中水、下水と三種類の水を使うような住宅、初めから街の水道の配管を三種類に考えた配管をして置くと言つたようなことも一つの試みとしてやつてはどうかと言ふ訳です。

それからもう一つは私が公団辺りに話をしてゐることで、何処まで実現するか判りませんけれども、高齢化社会に対応する町を作つたらどうかと言ふことです。御承知のように現在高齢化社会が話題になっております。六十五才以上の人を高齢者と見なしておる訳ですが、六十五歳以上の人が全体の人口に占める比率は今日本では九・六%です。ヨーロッパ諸国では大体十四・五%ですが、これは永年かかつて十四・五%までいった訳でこの線まで達すると大体的社会的にも行き詰まる、そしていろんな点でそれ以上高齢化が進まないと言ふのがヨーロッパ諸国の現状であります。それ以上に進みますと社会保障に対して大変金が掛る訳でして税金の非常に大きな部分をそれに使わなくちゃ足りないと言ふ事で社会問題になつてゐる訳ですが、日本は今の所九・六%ですけれども今から二十年位すると十五%を超すだろう、将来もこの人口の傾向が進めば二十%

を越すであろう、つまり五人に一人が六十五歳以上である社会が生まれるであろうと言われております。

高齢化の比率が二十%を越すような社会は人類が未だ経験したことがない社会ですけれど、日本はそう言う社会に遭遇する、その時どうして生活するかを考えると、公的な保障と言いますか、老人に対して住居を与える、あるいはある程度の生活費の補助をすと言ったような今迄の社会保障、福祉国家と言った考え方で到底対応出来ない訳です。働く人間は今より減ってくる。そして社会から恩恵を受けなきゃならない老人はどんどん増えて今の二倍にもなると、そういう事はとても出来ない訳です。これが高齢化問題になっておる所でございます。

それを何とか切り抜ける為には、もう一度家族制度と言うものを見直さなければならぬ。所謂核家族がどんどん進行する状態ではとてもそれを救済出来ない。そこで住宅も考え直して、三世代が住むように、子供と両親と、お祖父さんお祖母さんと言った三世代が一緒に住むような住宅も考える。老人と老人との間でコミュニケーションが出来るようにする、働ける老人は働くんだというような街を造ってみようではないか、そう言う街については其の中を自動車は一切走らない、そして騒音の無い、大気汚染の無い、しかも老人も安心して道を歩けるような、そう言う街を創って見てはどうか。老人の少ない今の日本の街では隣同志で老人がおれば宜しいですけど、必ずしもそうではありませんので老人同志が助け合おうとしてもうまく行かない。そこで老

人がうんと沢山おるような、つまり五人に一人が老人であるような街を造ってしまつて、そして老人はお互いに助け合ふんだと行つたことをやってみたらどうか。これは住宅政策としてうまく行くのかどうか、住宅公団の人は考えさしてくれと言つてるので私の言うことが実現するかどうか判りません。しかしそういうことをやって老人が助け合うことによつて必ずしも社会保障に頼らなくても、楽しい、安定した生活が出来るような街を造つてみると言うことは、それはそれなりに意義があると思います。そう言うことで、そう言う街を造つて見てはどうか。

その他二十一世紀に起る問題はもう判つておる訳ですから、それに対応出来るような街を幸にクラスターが九つも出来る訳ですから、夫々の所でいろんな事をやってみてはどうか、ただ住宅を建てるだけでなく、ある目的意識を持った、二十一世紀に対応出来るような街を造つて見てはどうかと提言の中でもそう言う趣旨の事を書き、住宅を造ろうとしてゐる人達にもそう言う呼び掛けをしてゐるのが現状でございます。

その他第二次提言に書いてある事を申し上げますと、いろんな食糧問題であるとか、南北問題であるとか、あるいは文化の問題、国立芸術総合センターにも関連がある訳ですけれども、単に物質文明を追い掛けるのではなくて、もう少し文化と言うものにも目を向けて未来の社会を考えなければならぬという事でございます。そういうようにいろんな事を考えておつて何処迄実現するか判りませんが、いろんな構想は提言の随所に出ております。夢は大きく膨らんでおります

が、何処迄実現するか判りません。

私自体そう言う研究都市が実現しても自分で研究出来る年令ではございませんし、私は今申し上げた事が実現出来るような場を設定することに私の任務があると思つて、この点は私の健康の許す限りやつて見たいと思つている訳ですけれど、何分非常に大きな、又年月を要することでございますまして私自体何時まで生きるか判りませんし、何処迄実現するか判りません。国全体として最初に申し上げたように各省庁が研究に着手して所謂ナショナルプロジェクトとなつたので私としては大変喜んでおる訳ですけども、これは国に頼るだけではいけませんので、今日の皆様方に私の考え方を御理解頂いて今後とも文化学術研究都市の発展を見守つて頂きたいし、御支援と御協力を得たいと思ひます。

長い間御静聴有難うございました。

(京都大学名誉教授)